

## 江戸時代人の見た富士-2

石川 博 (甲府クラブ)



### 江戸時代人の見た富士 その5

江戸時代人は百人一首に親しんでいた。そこで山辺赤人の「田子の浦にうち出でてみれば白妙の富士のたかねに雪はふりつつ」をネタに、多くの川柳や狂歌が作られた。「田子の浦白きをほめる赤い人」は、白と赤の対照。狂歌になると「白たへの富士を赤人青ぎ見て黄くろうとれいによんだ歌の黒人」と「仰ぎ」に「青」、「きれい」に「黄」の漢字を充てて、無理やり五色を詠み込んでいる。それでは、「奥山と香具山の間富士の山」とはどんな意味だろう。そう、百人一首の順番だ。2番目が持統天皇の「天の香具山」の歌、5番目が猿丸太夫の「奥山に」の歌。その二首に挟まれて4番目に赤人のこの歌がある。

(甲府クラブブリテン:2011年11月号)

### 江戸時代人の見た富士 その6

富士山は、芙蓉峰などと呼ばれることもあるが、これは山頂を芙蓉の花弁にたとえたものだ。もう一つ、江戸時代には「二十山(はたちやま)」という別名があった。これは「伊勢物語」で、富士山を「京都でいえば比叡山を二十ほど重ねたようだ」と説明していることによる。「業平(なりひら)に二十くらいと姫見られ」。伊勢物語の主人公業平は色男として有名。「姫」は、富士山のことで、祭神である此花咲屋姫(このはなさくやひめ)を指す。「二十でも姉といふべ

き山もなし」とは、富士以上の高い山はないのに、まだ二十なんだ、と詠んでいる。「同い年いつでも若い月と富士」。富士と月が同い年とは？ <お月さんいくつ、十三、七つ>という俗謡から、月の年齢も $13+7=20$ とみなして、やはり二十だというが  
ちの句だ。

また、伊勢物語のこの箇所には、五月(当時は夏)なのに雪の積もった富士を詠んだ、「時知らぬ山は富士の嶺いつとてか鹿の子まだらに雪のふるらむ」と



いう和歌が添えら

**尾形光琳の伊勢物語の絵**

れている。この

「時」は季節のことだが、それを わざとずらして「時知らぬ山はいつでも二十なり」、そして「不老不死たもって今に二十山」という句もある。竹取物語の末尾の、富士に「不死」の薬を置いて行ったという記述をも利用した句だ。大田南畝も「春秋に富む士(さむらい)の山なればいつも二十の心地こそすれ」と詠んだ。「富士」を分解して「富むさむらい」とし、春秋に富む(若い)=二十というわけだ。

今でも相撲界に、二十山親方がいるが、元々は江戸時代のしこ名で、もちろん富士山から名づけられた。

(甲府クラブブリテン:2011年12月号)

## 江戸時代人の見た富士 その7

江戸時代には中国の瀟湘八景に倣い、様々な八景が定められた。近江八景、金沢八景などが有名だが、富士にちなむもので、「富士北麓八景」を描いた絵が残されている。ここでは河口湖を描いた「船津帰帆」を掲出する。他には「小佐野落鳴」「鵜頭坂夜雨」「水上山晚鐘」「平山秋月」「社中夕照」「小倉山晴嵐」「三ツ峠暮雪」である。

さて、「富士五湖」という語は江戸時代に



「船津帰帆」富士北麓八景より

見られない。もちろん五つの湖はあった。歴史的には平安時代の富士の噴火によって、「せのうみ」と呼ばれていた大きな湖が分割されて、河口湖や西湖が生じたという。江戸時代の甲斐の国の地図を見ると、五つの湖のほかに、明見湖と四尾連湖が記されていることが多い。それぞれ水面の面積は、五湖より狭いが、湖と認識されていたのである。

明見湖サイズの水面は他にもあっただろうが、わざわざ地図に記されたのは、理由がある。それは、富士信仰において、富士八海と言われ、丁寧な信者は富士登山の前

に八つの湖をめぐって体を清めたからである。現在の五湖に先述の二つ、さらに駿河国の須戸湖（現在は陸化が進み、浮島が原と呼ばれている）で八つになる。

明治になっても「富士五湖」という括りはない。昭和二年、日本新八景を選定するハガキ投票が行われた。その際、河口湖、山中湖などとそれぞれで投票するより、「富士五湖」と一括して投票した方がいい、と富士急の創業者堀内良平が提案したのだという。

(甲府クラブブリテン:2012年1月号)

## 江戸時代人の見た富士 その8

江戸時代、正月二日には、宝船の絵を売



った。そこには、

江戸東京博物館所蔵 宝船絵

七福神と和歌が記されており、これを枕の下に敷いて寝るといい夢を見る、と言われていた。その和歌は「長き夜の遠の眠(ねふ)りのみな目覚め波乗り船の音のよきかな」という回文(上から読んでも下から読んでも同じ文)であった。今では、初夢とは元旦の夜の夢、あるいはその年初めて見る夢を指すこともあるようだが、江戸時代には、二日の夜、宝船の絵の上で見る特別な夢のことだった。

初夢に限らず縁起の良い夢と言え「一富

士、二鷹、三なすび」だ。どうしてこの三つが並んだのか、その理由は昔からわかっていない。

「富士の夢<sup>やなか</sup>谷中へ一分やってみる」という川柳がある。谷中とは感応寺のことで、富くじ（宝くじ）の胴元だった。富士山の夢を見たので、一分（一両の四分の一）出して宝くじを買ってみよう、という意味。「富士の夢丸綿召すと乳母判じ」は、いいところの娘さんが、富士山の夢を見たというので、乳母は縁談があると夢占いで判じた、という句だ。

「一に富士二に鷹の羽の夜討ちなり」となるとやや難しい。「富士は孝鷹は忠義の夜討ちなり」と合わせると解釈できる。この場合の富士とは、曾我兄弟の仇討の「富士の巻狩り」のこと。また、鷹の羽は、浅野家の紋であるところから、「赤穂浪士の討ち入り」を示す。つまり夢からは離れた句である。最後は「富士山を友達の気で鷹となす」。鷹や茄子と富士山はその重みが全然違うのだが、三つ並んだことで、鷹や茄子がすっかりいい気分になって、富士山は俺の友達なんだぞ、と自慢しているというとぼけた句。

（甲府クラブブリテン:2012年2月号）